野荒らし庄衛

と、いって天狗をだまし、魚をもって帰ってきたそうじゃ。

金武陽子

野荒らし庄衛

昔、美濃地方の根本村はひどい水ききんにおそわれたことがありました。

その年は田植の始まる時分から、くる日もくる日も日照りにみまわれ、井戸水を田んぼへ運んでやっと田植ができたありさまでした。

しかし、せっかく植えた稲もこぶしを握ったように先から枯れていき、田んぼはひび割れて、こんな有様が長く続けば自分たちの命をつなぐ粥もすすれず、年貢さえ納められそうにありませんでした。

村人たちは天を仰いで、

「どうぞ雨をおめぐみください。どうぞ田んぼや畑をうるおしてください。」

と、一心に祈りました。

そんな祈りがつうじてか、それでも秋をむかえることができ、やせた稲かぶにはわずかではあったが稲がみのりました。

「やれ、ありがたいのう。これでどうやら今年も冬を越すことができるのう。」

「よかったのう。おかげで命がつなげるのう。」

村人たちは顔を合わせるごとにそう喜びあっていました。

ところが、そんなある日思いもかけぬできごとがおこりました。

きのうはあそこ、きょうはここの田んぼからせっかくみのった稲穂が切りとられているのです。

「いったいこれはどうしたことか。だれのしわざか。」

「えらいことになった、なんとかしてくれよう。」

村人たちは目を血ばしらせ、からだをふるわせてさわぎたてました。そして、ひとところに集まってだれのしわざか詮議をしました。

しかし、夜明けになっても村人の中には名のり出る者はもちろんなく、たしかにだれだときめつけることのできる者も見当たらなかったのです。そんな中で、だれいうとなく、うたがわしい者を札入れできめることになりました。

その結果は、ひと札残らず外者の庄衛という男に落ちたのです。

庄衛は、つい先ごろこの村へふらりとやって来た若い男で、だれひとり身寄りもなく、耕す田畑はおろか寝る所さえない男でした。

しかし、たいしてわるそうな男でもなく、稲を盗んだという確かな証拠もないのに、たった一度の札入れで庄衛のしわざときめてしまったのです。

村人たちは、無言のままうなずき合うと、庄衛の住む小屋へおしかけ、いやがる庄衛を大原川の土手へ引きずって来たのです。

わらじと赤ざや

「わしじゃない。天地にちかってわしじゃない。」
からだじゅうからしぼり出すような声の中で村人は目をぎらつかせ、土手に穴を掘り庄衛をけおとしてうめてしまいました。
村人たちはたがいにえたいの知れないものにおびえながら、とっくに暮れた闇の中へちっていきました。

やがて一年の月日が流れ、庄衛を生きうめにした日が来ました。どうしたものかあちこちの家では村人が高い熱にうなされ、もだえ苦しんで米のとぎ汁のようなものを出して死んでいったのです。
村人たちはたれいうとなく、
「おそがいことや、庄衛のたたりにちがいない。」
そう言い合っておののきました。そして、この先こうしたことのないように、庄衛を生きうめにしたところに石の五輪塔を建て、庄衛の冥福を祈りました。
そののちも、この根本村の人たちは一ヶ月に一日、庄衛の命日として仕事を休み、庄衛の霊をなぐさめたということです。

飯田　美智子